

# OSFだより

第103号 2010(H22)年8月



発行・編集 財団法人岡本国際奨学交流財団 263-0023 千葉市稲毛区緑町1丁目19番11号 TEL043-248-8808 FAX043-238-4138  
osf-midori1911@codacoda.ocn.ne.jp http://www.osf-family.com  
OSF(Okamoto Scholarship Foundation)の活動案内 1、留学生宿舎の運営 2、留学生へ奨学金の支給 3、留学生の学習&人生相談・国際交流

## 零からの挑戦

会長 岡本 正

中国の文化大革命が終わってまもなくの頃、私は広州の中国見本市に出るために戦後初めて中国の土を踏んだ。駅に着くと正面に大きな写真が3枚掛けであった。毛沢東、マルクス、レーニンの写真。周辺は老若男女すべて人民服一色で、他のカラーはない。中国人ガイドさんが見本市を案内してくれた。その時の会話だ。

ガイド「岡本さんはどこの大学を出たのか」  
私「京大だ」

ガイドさん、不思議そうな顔をしてさらに聞く。  
「京大を出て、なぜ小売商をしているのか」

私にはこの質問の意味がよく理解できなかった。要するに、「一流大学を出た者は役人、大会社、大銀行へ行くべきで、小売商になるのはおかしい」ということのようなのだ。

同じ頃に、アメリカの一流大学の卒業生が、どんな進路を希望しているかという記事を読んだ。

(1)ベンチャービジネス、(2)自由業(弁護士・弁理士・コンサルタントなど)、(3)大会社・大銀行、

(4)役人の順番で、中国、日本の常識とはまさに正反対だった。私の場合も考えてみると、学友は収入と地位の安定を求めて役人や、銀行の道を選んだ人が多い。リスクを恐れて、中小企業へは行かない。私はガイドさんの言う通り、少し変わっていたのかもしれない。

400年前、オランダは150万人ほどの小国ながら、大国と並び大航海へと乗り出した。アフリカの南端(喜望峰)を回って東アジアにもやってきた。多くのリスクを覚悟の上で。

皆さんはシェル石油をよくご存じだろう。貝のマークのガソリンスタンドは世界中で目にすることができる。この会社はオランダに本拠を置く会社だ。初めはカスピ海で集めた美しい貝殻を、女性の装身具としてヨーロッパに売り、莫大な利益を得た。その後、インドネシアで油田開発を手掛ける。だから、今でもシェルのシンボルマークは貝の絵だ。

現代でもリスクを覚悟して未知の世界へ挑戦する力がないと、国際間の激しい競争に生き残れない。この戦いに勝って、世界一の経済力を勝ち取ったのがアメリカだ。

アメリカはもともと多民族国家であり、主としてヨーロッパの白人が、経済的・政治的・民族的な圧迫を逃れて新しく建設した国だ。

映画「タイタニック」に出てくる乗客は貧乏なアイルランドの農民だった。(一部の金持ちの一等船客は別として) 彼らはジャガイモの不作による餓死を逃れて、アイルランドからアメリカへ移住する途上だった。

それらリスクを背負ってアメリカへ渡った移民の中からケネディ、レーガン、クリントンなどの有名な大統領が出たのだ。

大学を出て役人・大会社・大銀行へ行くのもよい。しかし、ただそれだけでは世界の経済と文化は前進しない。より優秀な人材が、リスクを覚悟して、零からの挑戦をしてほしい。

今度日本の中規模の農業機械メーカーが、カンボジアへ新しい精米機を輸出する計画でいる。従来の精米機に比べ、格段と性能がよい。カンボジアの米の生産・輸出に大きく貢献するだろう。この仕事のリーダーがOSFのOBだ。私はその成功を心から期待している。零からの挑戦だ。がんばってほしい。

馬 躍 (奨学生)

中国 (遼寧省)

千葉大学 工学研究科 人工システム科学専攻



### 日本に来て一番感動したこと

皆さんはビーフが好きですか。日本では 100g 千円という高価なビーフもありますが、私にとって最高のビーフは「マービーフ」です。

私はマヨウと言います。大学時代に内燃機関に関して学び、卒業後、中国の国営製船会社に入りました。当時、自身の専門知識の不足を深く感じ、エンジニアになる夢を実現するためにもっと勉強したいと考え、日本への留学を決意しました。そして、千葉大学工学研究科入学を目指し、家族や大学の指導教官、友人たちに支えられ、2006年4月に来日、2007年に研究生として森吉研究室に入りました。

新しい環境の中、夢に一歩でも近づくために1年間必死で努力しました。ですが、その年の大学院入試は不合格でした。これで終わりかと、悔しいよりも悲しかったです。そんな時、森吉先生から、「今、研究室で BBQ をやっているよ。あなたのために特別な物を用意したから早く来て」と誘われました。重い気持ちのまま研究室へ行くと、眼に映ったのは先生と研究室のメンバーの笑顔でした。先生は

私の肩を叩き、高そうな牛肉を持って「これはあなたのために買ったマービーフだよ。次の試験までもう一度頑張りなさい」とおっしゃいました。皆も「一緒に頑張りよう」と言ってくれました。

「マービーフ」は私のための特別なビーフでした。涙で目をかすませながら完食しました。森吉先生と研究室のメンバーからパワーをもらい、私は現在、修士1年生として研究に励んでいます。実験に追われ、忙しく辛いときもありますが、とても充実した毎日を過ごしています。森吉先生と研究室の皆に、心から感謝しています。

この4年間、色々なことがありました。嬉しかったことや悲しかったこと、驚き感激したことなどたくさんあります。その中で、2007年のこの出来事は今も私の心にはっきりと焼きついています。

この「マービーフ」が、私が日本に来て一番感動したことです。

包 那拉 (奨学生)

中国 (内モンゴル)

千葉大学 工学研究科 建築都市科学専攻



### 日本に来て一番感動したこと

私は中国内モンゴルから来た留学生です。2年半前に広大な大草原から繁華な大都市に来ました。好奇心が強い私、最初は楽しく感じました。しかし、生活の苦しさや進学の難しさに私は現実を考えさせられました。

実家から経済の援助がもらえないため、すべて自分の力で乗り越えていかなければなりません。日本に来て1年目、日本で生活の生活を早く安定させるため、一生懸命アルバイトをしました。2年目は、千葉大学の研究生になり、アルバイトより入学試験のほうが重要でした。そして、アルバイトを減らして、勉強にがんばりました。でも当時、過去問題を基礎として、過去問題の範囲でしか勉強しませんでした。このように、3ヶ月自習して、日本人と一緒に入学試験に参加しました。でも、準備が足りないため、失敗は当たり前でした。それは、私にとって大ショックでした。

その時、先生と友だちから精神的、物質的な援助を頂け、本当に感動しました。試験の後、みんなは試験の失敗した原因を分析し、いろいろなアドバイスをしてくれたので、私は諦めないで、次の試験に参加することを迷いなく決めました。勉強に時間をかけるに従って、生活はもっと厳しくなりました。アルバイトからもらうお給料は、生活費と

学費に足りなかったからです。それは、日本に来て一番苦しい時代でした。次の試験に合格できるように、研究室の先輩は自分が入学試験に参加したとき、勉強していた資料と学部授業の時の筆記、テストなどの資料を2時間も電車に乗って、私に届けてくれました。その時、私は本当に感動して、涙が出るぐらいになって、何も言えなくなりました。

それから、私は成功するために必死にがんばりました。毎日8時から午後3時半まで図書館で勉強し、1時間電車に乗ってアルバイト先に行きました。時間を節約するため昼ごはんは電車を食べ、夜11時半に家に帰り、また1時間ぐらい勉強し、朝時間通り7時に起き学校へ行って、1日が始まります。このように、苦しいけれど充実した留学生活を送り、3ヶ月勉強して、もう一回試験を受けました。みんなの助けと自分の努力で幸運に恵まれ、私は千葉大学の正規生になりました。好きな日本で、好きな学校で、好きな研究室で、好きな先生と友だちと一緒に勉強できて、自分の夢が叶いました。日本に留学したことは間違いではないと感じ、これからまた一生懸命がんばり続けたいと思っています。

## 平和を祈り

郭 保竹 中国（山東省）

2010年8月5、6、7日に、OSF財団の佐野先生が私たち仲間5人を引率して、広島へ連れて行ってくださいました。私たちは6日に「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」に参列させて頂きました。ちょうど65年前の1945(昭和20)年8月6日午前8時15分、人類史上初めての原子爆弾が広島に投下されました。原爆は、ドームから150メートルほど離れた島病院の上空約580メートルで炸裂しました。爆心地は島病院です。原爆はほぼ真下にあるドームを直撃しました。そのため、いま私たちが目にするように原爆ドームの枠組みだけは残りましたが、内部は焼け落ちてしまいました。1945年8月6日は世界の人々が、忘れてはならない日で人類の歴史上、一番悲惨な出来事だったのではないかと感じています。このとき爆心地の温度は、3千度から4千度にも達し、それは鉄を溶かすことのできる温度約1500度の3倍も高い温度でした。爆風は、最初の段階では1秒間に440メートルの速さで爆心地周辺を襲いました。10秒後には直径4キロメートル以内のほとんどの建物は破壊され、人々は大変な被害を受けました。原爆は熱線、爆風、放射線を放ち、一瞬にして広島

街を焦土に変え、人びとを死に追いやりました。当時、ドームの中ではおよそ30人の人々が働いていたそうですが、その人たちは一瞬のうちに死んでしまいました。広島市に住む多くの非戦闘員の人たちの命が奪われました。

式典のあと、私たちは広島平和記念資料館を見学し、夜のとうろう流しも参加しました。外国人留学生として、私は初めてその場に居て、沈痛な雰囲気や体の中に染み込ませていました。原爆死没者慰霊碑の「安らかに眠って下さい 過ちは繰返させぬから」という言葉を絶対に守ることが、今生きている私たちの役目でもあり、私たち自身の平和を維持することの使命感に燃えたと感じました。今日ドームは私たちに、戦争と核兵器の非人間的な悲惨な現実を伝える証人として立っているばかりでなく、もうこれ以上、私たちが過ちを繰り返さないための警鐘を鳴らす役割を果たしているのです。

人は幸せになるために生まれ、そして幸せであるためには、この世が平和であることが本当に大切だと思います。原爆ドームの前になると、より一層その思いが強くなります。これからはずっと、いつのときでも、どここの場所でも、永遠に世界が平和であることを祈ります。

## 「広島平和祈念式」 王 曉嵐 中国（湖北省）

8月5日、期末テストが終わった直後、私は新幹線に乗って広島に向かい始めた。ほかのメンバーと一緒に安芸の宮島にも行ってみたかったが、テストがあるため、残念ながら行けなかった。

広島に着いたのは午後6時すぎで、皆と待ち合わせして食事に行った。その「ふみ」という店の女将さんに8月6日の平和祈念式のため広島にやってきたと話したら、原爆について様々な話を聞かせてくれた。広島が原爆投下された時、この女将さんは一才ぐらいで、何も知らなかったが、運よく生きてこられた。ただしやはり原爆の影響で女将さんの身体は左の部分に比べて右の部分が完全にできていない。広島で原爆で広島に住む人が放射能を吸っているから身体が不健康だといううわさで結婚できないこともあった。戦争はとて恐ろしいものでもう二度と起こらないでほしいと女将さんが何回も言っていた。この話で、私ははじめて原爆というものに近づいてきた気がした。

8月6日の朝、私たちはホテルから出発して平和公園に向かった。途中、信号が消えていることに気がついた。参加する人ほぼ全員が静かに歩いている姿も見た。夏の暑さにもかかわらず参加しに来た人が大勢だった。

平和祈念式が始まったのは朝の8時だった。最初は原爆死没者名簿奉納で、次に式辞、献花、黙とう、それから広島市長が平和宣言をし、次は放鳩、子供代表が平和への誓いをし、それから内閣総理大臣、広島県知事、国際連合事務総長のあいさつ、最後には「広島平和の歌」の合唱で終わり。そのなか、一番印象に残っているのが、広島市長の平和宣言のなかの「僕たちが生きてきたのは賢いからではなく、ただ運が良かったからです」という話

だった。それから、潘基文国連事務総長のあいさつのなかの「皆さんは力を合わせ、広島を平和の‘震源地’としてきました」という話に感心した。

平和祈念式が終わった後、私たちは平和記念資料館に行った。そこでは原爆当時の様子が写真や品物で表されていた。原爆で死んだ人々は、死亡というよりとけていくと言ったほうが正しいかもしれない。原爆があまりに恐ろしいものということがよくわかった。戦争なんかはもう二度とこないようにと、こころから祈った。

平和公園から歩いて5分ぐらい、原爆ドームに着く。原爆にあった本物の建物は視覚的に衝撃だった。65年前、この真上で原爆が爆発したのだ。「命は短くとも、記憶は長く残ります」という潘基文国連事務総長が言った言葉や、「やすらかに おねむりください、過ちは再びおこしませんから」という原爆記念碑の文字などに、とても感心した。

今回の広島の旅で自分の目や耳で原爆のを感じ、原爆というものの恐ろしさを十分にわかった。戦争がなくなり、原爆がなくなるように、全世界の永遠の平和をこころから祈り続けている。



# トピックスTopics!

## 原爆慰霊式典参加

8月5日～7日、今年も広島原爆慰霊祭への参加ツアーが佐野先生引率の下行われた。慰霊祭には今年初めてアメリカの大使などが出席し、意義深い式となった。世界平和を祈るよい機会であったと信じる。

広島ではOBの李娜さんと合流し、  
楽しいひと時を過ごした。

3日目は皆で京都を訪れた。短い期間だが内容の濃い旅となっただろう。  
佐野さん、暑い中ありがとうございました。



## 鴨川海水浴

◎ 8月8日～12日、鴨川合宿実施。延べ30人の学生が鴨川にやってきた。

海で遊び、バーベキューや花火を満喫した。  
日頃の忙しさや、悩みの気晴らしになっただろうか。



## 結婚・出産おめでとう!

◎ 4月25日、OBのパンさん(H13 奨学生、ベトナム)に長男誕生。去年の結婚についてうれしい便りだ。

◎ 7月25日、OBの唐文英さん(H16 奨学生、中国)が横浜で結婚式を挙げた。  
現役中は奨学生をまとめあげてくれた頼もしいボスだった。  
きっと幸せをつかんでいくだろう。



♡ お幸せに ♡

今年の猛暑はつらかったですね。夏バテしていませんか。  
暑い中、8月15日のお盆には、会館に多くのOBが里帰りしてにぎわった。みな元気そうで、親父としてはうれしい一日でした。

## 会館OB会

◎ 7月11日、7月初旬とはいえ、30度を超える暑い日だったが、たくさんの懐かしい顔が集まった。先日逝去した陳君の思い出を語りあったり、水を掛け合いはめをはずしたり楽しい時間を過ごした。



## OB来団

～夏の間、たくさんのOB達が会いに来てくれた。  
暑い中をありがとう。～

◎ 6月30日、OBの楊炫観さん(H16、台湾)が来日し、顔を見せてくれた。昔の「アホグループ」のボスで、台湾の大学で活躍している。早速仲間が集めた。  
(参加した「アホメンバー」: 唐文英・陳艶・王維婷・エンクザヤ・姜美子(敬称略))

◎ 7月15日、OBの倪悦勇さん(H17 奨学生、中国)が来団。大阪の会社で専門分野を生かした幹部社員として活躍している。

◎ 7月17日、OBの野田克則さん(H9 会館生、日本)が来団。来週イギリスへ留学が決まったそうだ。

◎ 7月23日、OBのタンさん(H15 会館生、ベトナム)一家と母上が来団。  
母上はタン君の妹の出産のために来日。

◎ 8月1日、OBのナラマンドラさん(H15 奨学生、中国)が来団。カナダでの研究を終え、中国の大学の先生として就職予定。帰国途中に立ち寄ってくれた。

◎ 8月6日、OBの呉炎さん(H9 奨学生、中国)が来団。久しぶりに会った娘さんも大きくなり、幸せそうだった。

◎ 8月18日、OBのタオさん(H9 奨学生、ベトナム)が来団。会館で一泊した。彼はホーチミン市で学生会館を作り、立派に運営している。

